2Dp-8

岩手県の麻について（1）

尚絅短大　○村田陽子　遠藤時子　　北海道教育大　斉藤祥子

目的　古代から我々祖先の衣生活を支えてきた最も重要な植物に麻類がある。その苧は糸や布として家族の衣服にする他に調布として貢納され、古代国家の経済を支えてきた。また綱索、網、袋、畳糸、小は鼻緒に至るまで麻なくして生活は存立しなかった。明治以降、木綿の急激な普及によって麻類は衣料の王座を追われ、特に大麻は戦後、その麻薬効果が知られてからは栽培が禁止された。また日常衣服の洋装化に伴い苧麻等の需要も激減し、衣服原料としての麻類、特に大麻の復活はあり得ない。この麻類の終焉に当り、その利用の全貌を明らかにし、記録することを目的として今回は岩手県について報告する。

方法　各県毎に市町村史・誌より麻類および衣料原料に関する記述を収集、整理し、特色のある地域については実態調査を行う。

結果　岩手県は山地が多く、気候は冷涼で、大麻・苧麻の生育には良いが、木綿の栽培には適せず、麻類への依存度は大であった。収集した市町村史・誌23点によれば、大正中期頃まで日常の衣生活の全ては大麻に負い、木綿の利用は古手に始まるとある。明治になって「しの綿」から糸をとり自織して晴着にした。やがて糸を買い織に織って漸次大麻を減じていった。しかし股引等の下衣は濡れた部分のみ吸水するので大麻が喜ばれ、他に綱・袋などの使い料として昭和20年代末までの利用を確かめることができた。また大麻の製苧法も3種あり、調整された苧にも太麻、えり麻、ただ麻、又は白木、青木、赤木など品質に差のあるものが得られており、蚊張などの原料生産も行われていた。